岩手県立大学社会福祉学部紀要　第3巻第1号（2000.9）41—47

近代の福祉に生きた女性パイオニア（その4）

——フローレンス・ナイチンゲールとジェーン・アダムス——

鈴　木　真理子

Women Pioneers Who Lived for Modern Social Work (4)

——Florence Nightingale and Jane Adams——

Mariko　SUZUKI

第3章　人生をかける社会的使命の発見

By the end of the nineteenth century, there spread the attitude of acceptance of women's own choices in United States. Although this remarkable attitude indicated women's entry to the field of politic and culture、marriage still restricted and disturbed the women's social activity. But Jane Adams, who wanted to achieve one's will, spent her life not as a wife or a mother but as one individual like Nightingale. Their free choices could be made because they were economically independent inherited a great amount of money from their parents. Economical independence is a crucial element of self-esteem as well as mental independence.

As most of the upper class family sent their sons and daughters to Europe, Jane Adams went to Europe. In 1883, Lady Adams left for Great Britain with her college colleague, Sara Anderson. They visited museums, cathedrals and historical ruins feeling its longer history and more traditional culture compared to United States. Jane wrote down what she saw and how she felt during her journey with details. That means her journey did not end up only sightseeing but a search for what she should do in the future.

Also Jane excels in writing like Nightingale and this ability was very necessary for her work in the future. Both Jane and Nightingale used this ability in propaganda and record. Compared with Nightingale's brief sentences Jane's were descriptive. That shows the difference of how they spent their childhood. From the sentences one writes it is interesting to know his personality, the education he had and the surroundings in which he was brought up.

1　若い女性に生きがいとなる仕事を
―スラム貧困から受けたショック―

新しい体験に彩られたヨーロッパ旅行で、アダムスが見たものは美しい面ばかりではなかった。文明の発達は常に良きものばかりもたらすとは限らない。産業発達の都市化により、ロンドン下町には農村からの貧民があふれ、裏通りはスラム化し、孤児や犯罪、疫病がはびこっていた。当時の悲惨な都市の有り様はデイケンズのオリバー・ツイスト（1837年）などの小説にリアルに描かれており、社会の貧困の数量的把握を試みた篤志家、チャールズ・ブース[1]らによって行われたロンドン・サーベイも都市の3分の1が貧困に喘いでいるという事実を証明した。

アダムスはこのロンドン・イーストエンドの町、〝死と悲しみだけの町〟に足を踏みいれた時のショックを『突然の死の幻想』でこう譬えている。「土曜の夜、露店商たちは売れ残った野菜や果実をせりにかけるため、ロンドン東部のスラムに集まってくる。捨ててしまうより二束三文でも僅かな金にしたほうがましだからだ。浮浪者やその日ぐらしの貧乏人が集まってきて、せりにかける光景をアダムス一行は見た。ぼろをまとって恐らく仕事もない、垢と汚れにまみれた浮浪者の一団が、野菜荷車のまわりに群がり、わずかの値段で勝ちとったキャベツを飢えにまかせて、その場でほうばり、かぶりだすおぞましい姿。かれらには人間らしい表情も血の気けも失せ、飢えと疲労から動物的な狡猾さと卑しさしか見いだせなかった。中流のロンドンっ子の案内人は、優越感から「まさに10分の1の社会の沈澱物」と蔑みの言葉で彼らのことを説明した。誇りや進歩とは無縁のゴミのような人間たちが、我も我もと手を差し出す光景はこの世のものとは思えなかった」アダムスは記している。その体験が余りに強烈で、「いたましい思い出で何物にも安らぎを得られず、それから数週間、そのおそるべき人間の欠乏と不幸をみないように、貧民街をさけて通ったほどであった。」[2]

これほどの都市の吹留りに澱む貧困者の有り様に、本人たちより人類に希望と人間の尊厳を期待する人々の方が、打ちのめされる感性をもっているものである。そしてアダムスも自分の安逸な享楽的生活にかまけて、社会の悲惨さを無視できる部類の人間ではなかった。そして、自分と同じ部類の人々の存在に気付いている。「イタリアの乞食もオーストリアの採塩夫も、ロンドンのイーストエンドほどひどい人間の破滅は感じられなかった。ここで多少なりとも付け加えねばならぬことは、勇敢にもこれらの極貧者と運命をともにし、教会や礼拝堂の救済事業や慈善において貧困者の困難を和らげようと努力している数百の人達のことは忘れてはならない」[3]

―芸術・宗教よりも社会事業―

この経験から人間社会の光より影の部分に引かれる自らの傾向を認め、オペラや画廊を訪れても多くの文化、芸術は、人間の行動を究極的に決定するには無力だとの確信に至る。

「人間の生活の4分の3は教養ではなく行動なのだ。現代世界の苦悩というべき貧困の問題において、教養は人生の慰めや救いにならない」[4]「道徳や教育が現実の生活からかけ離れた抽象の世界のものにならぬよう」「現実の生と死の決断を迫られる時にさえ、文学的表現しかできないように、現実のリアリテーより表現を優位におくような態度は本末転倒である」[5] と評論家的高みの見物的態度、言葉だけの教養主義、道徳、表現だけに囚われるセンチメンタリズムへの手厳しい批判を展開している。このようにアダムスはなお芸術に対して愛好家ではあっても、単なる情緒の発散や自己目的化した芸術や文化より、現実と四つに取り組む行動、社会活動に価値をおくタイプの人間であることを、自ら認識したのである。

「現実の醜悪さから目をそらさない芸術」としてアダムスが唯一評価したのは、アルベルト・デユラー[6]であった。その迫り来る戦乱を予言するかのような、人間の悲惨を重々しく描いた作風であった。アダムスは旅行の贅沢としてデユラーの原作といわれる絵画、明るく安らぎを与えてくれるイタリア、ローマの彫刻、南イタリアの風景がなどを購入した。これらの芸術品は、後ハルハウスの画廊や美術館で地域の人々の目を楽しませ、スラムの人々の教養と文化の醸成に役立ったのである。

帰国してイリノイ州の実家に落ち着き25歳の夏を迎えたアダムスは、ナイチンゲールと同じ同一性の危機、自分自身を持て余し、自分がなんであり、何者であるべきかの実存的疑問に悩んでいた。時々すべての躍動感を奪うどうしようもない鬱の気分が襲ってきて、カリエスの後遺症にも苦しみながら、「自分の力だけで幸福を得ようとする自惚れや願いを捨てることだけが、より深い世界への入り口である」[7] という悟りに似た結論に達した。そこでクエーカーとして宗教的に孤高を保っている時代ではないと、情緒的な動機ではなく、現実的判断で長老派[8]に改宗した。

そこに到るまでには、ヨーロッパでの宗教的影響や幾つかの挫折体験もある。卒業直後友人と事業の夢を実現すべく、農場を共同購入し羊の飼育事業に挑んだ事もあったが、全くの素人のため失敗してかなりの資産を無くした。他にも財産の一部を西部の農業プロジェクトに投資したが、運わるく飢饉に見舞われ、農場の惨状を見てあこぎな取り立てなどできず、利益なく撤退したことなどの敗北があった。実業家には不向きで、父親のような商才はなかったわけだが、これは

父親のように徒弟時代の苦労がないので当然でもあろう。

この時アダムスはシカゴにおいて、デアコニッセ[9]の訓練学校で半年の訓練を受けている。ローマ滞在中、原始キリスト教に深く傾倒したのが、その動機であった。原始教会とはローマ時代の貧困者によって創設され、その頃からデアコニッセが貧困者のために働いていたことを知ったからである。ともかく様々な要因から、アメリカで主流のプロテルタント会派に属したことは、後のセツルメント活動賛同者を一般市民に広めるのに大いに役立つことになる。

2　社会事業女性パイオニアの誕生
―セツルメント活動こそわがライフワーク―

また家族関係では、義母は彼女と息子のジョージが結婚することを期待していた。しかしアダムズは生物学の勉強だけに没頭し、時代の典型的妻を期待しているジョージとは結婚する気はなかった。しかしその結果義母との関係はこじれ、アダムスはいたたまれず、自分の国と家族から逃れるように二度目のヨーロッパ旅行にでかけた。最初のヨーロッパ旅行ではマドモワゼル、レデイーと呼ばれるのがふさわしかたったアダムスも、もはや27歳、マダムと呼ばれるにふさわしい落ち着きと威厳を漂わせた大人の女性になっていた。また今度の目的は単に欧州見聞ではない確固たる理由があった。美術教員となった親友のエレンの学校と卒業した母校、ロックファードに寄贈する芸術作品を購入するためである。

サラとエレンの3人で絵画や彫刻などを物色し、エレンは絵の勉強を始めアダムスは原始キリスト教のカタコーム[10]の歴史的調査のため、イタリアにしばらく滞在した。アダムスは持病の座骨リューマチが再発し、旅を中断し、リビエラで療養して1887年から1888年と年を越す。しかし回復してスペインに回り、旅の話題にとスペインの闘牛を見物するが、その無意味な興奮と流血に怒りを感じ、自己嫌悪に陥る。その苛立ちは、自分の取り組むべき事業を先延ばし、時を浪費にしている自己自身へのものだった。

ついにその永遠の暗闇のトンネルから抜け出て、明るい世界に脱出せねばならぬ時がきた。それまで漠然と貧困者のための社会活動を思い描いていたアダムスは、恐る恐る連れのエレンに打ち明ける。「この計画を全部言ってしまうと、後には悩みだけが残るという不安を感じて言えなかった。黄金の夢は指の間からこぼれ落ちて、おろかなつまらない信念だけが手元に残されるような気がしたのである。」自分の心に秘めた思いが、口に出したとたんつまらない気まぐれに変わってしまうのでは、という不安をアダムスは感じていた。「しかしエレン・スターの友情とこの計画に対する意気込みと情熱によって、細かいことは別として、計画に確信と具体的構想ができた」[11]

時すでに最初にロンドンの貧困者の有り様にショックを受けてから、5年の月日が流れていた。決心がつくと即行動。いよいよとりかかる仕事の具体的準備のため、民衆の宮殿とたとえられるトインビーホール（Toynbee HALL）を訪ねる。貧困者とともに暮らす社会事業をおこすため、何を知り、何を支えとしたら良いかを学ぶため、期待と不安をもってロンドンに向かった。トインビーホールとは、世界で最初のセツルメント[12]で、バーネット師によって創設され、有名なアーノルド・トインビー[13]の死を悼み、1883年彼を記念して命名された。「これからの生活がいかに困難が多くとも、いまや受け身の生活は終わり、準備としては不完全であるが、永遠の準備期間から、決別したのである。」[14] と決意の程を記している。

―ドイツでの看護見習い生―

アダムスは伝導を、ナイチンゲールは看護を、共に仕事の最初の教育をデアコニッセの学校で受けている偶然は興味ふかい。その時代に女性の集団的社会奉仕活動はカソリックのシスター、ドイツのプロテスタント宗派のデアコニッセなど修道院[15]での聖職者組織のみであり、またそれらが一番秩序と質が伴っていたからである。

カイゼルヴェルト学園とは現在の西ドイツ、ライン川のほとりにあり、フリードナー牧師夫妻が発足させた、恐らく歴史で最初の看護学校である。村の牧師からの推薦状のある娘を預かり、倫理、宗教、看護法、基礎的医学、手当などを教え、村の病人や更生施設、孤児院、病院で実践活動をする。その評判は全ヨーロッパに聞こえ、それを聞いてドイツ全土から志願者の女性が集まっていた。訓練を受けたデアコニッセたちは、そこから世界の病院に派遣されていた。ナイチンゲールはこの活動が詳しく解説された年報を手にいれ、いつかそこで訓練をうけたいと心に決めていた。そしてブレースブリッジ夫妻とのローマ旅行を口実

に、やっと1850年7月、2週間この学園に宿泊して病院、孤児院、授産所をじっくりと見学するチャンスを得た。

ここでの新鮮な印象は持前の記録癖と文章力で、『カイゼルベルト学園』の見聞録にまとめられている。最初は親への手前、ナイチンゲール自身の強い希望で著者名を伏して出版されたが、現在もなおナイチンゲールの最初の著作として読み継がれている。内容はたんなる施設紹介文ではなく、施設の創立から貫くキリスト精神とその実践行動である施設の運営姿勢を称え、なすべきことを忘れているイギリス上流女性に対しての熱い呼びかけが添えられている。「大きなお嬢さんとして、特に義務も仕事もなく暮らしているみなさん、カイゼルベルトへ行ってデイアコニッセになりましょう。人の役にたつ仕事に携わりましょう。考えているだけではだめです。行動にでましょう」まさにナイチンゲール自身を奮い立たせるための一節である。

ここの2週間がいかに充実したものだったか「もう何も二度と私を悩まし、暗い気持ちに突き落とすことはできない。」30歳になったナイチンゲールが、カイゼルベルトでの夏に記した日記から推測できる。

「わたしはここで行われているあらゆることに興味をみいだし、心身ともに健やかです。わたしは今、生きることがどのようなことであるか、命を愛することがどういうことかを知りました」と両親に書き送った[16]。

ナイチンゲールは予備調査として実地訓練を受け、技術と知識を学んだが、いずれは看護学校をもちたいという思いが募る一方だった。たまたま姉が病気療養でドイツ、カイゼルベルトに湯治にいくことになり、ナイチンゲールは説得の末同伴し、3か月の研修を受ける許しを両親からもらった。32歳で待望のデイアコニッセとなれたのだ。

1851年7月6日、登録番号134号として、ドイツの田舎からきた普通の若い見習い生と同じ質素な生活とスパルタ式の充実した訓練を受ける。この学園でナイチンゲールがもっとも傾倒したことは、組織としてのまとまり、学園全体に漲る信仰の深さとデイアコニッセの道徳的態度の高さだった。修道院のように祈りのみでなく、医師の指示に従って貧しい人、病人の必要に応える実務的な仕事ぶりであった。ナイチンゲールは校長のフリードナー牧師を後々仕事面での父と仰ぎ、カイゼルベルトを心の故郷として、忘れることはなかった。

―若い女性の生きがいとなる社会事業―

上流階級の娘が自分の仕事を見つけられないまま享楽的社交に時間を浪費していることを知っており、「社会には看護という素晴らしい仕事があるのですよ」と檄を飛ばしたナイチンゲール同様、アダムスもアメリカ中流階層の女性の活躍の場として、セツルメント、社会福祉を考えていた。彼女もまたジョッブ(job)や労働(labour)、ワーク（work)ではない、天職、使命（vocation）を求めて、アメリカとヨーロッパを放浪したからである。

アダムスは資金集めに奔走する中、シカゴ婦人クラブメンバーにも加入ができ、全国女子カレッジ卒業生組織に協力を求めた。これらの代表の心をつかんだアッピールの言葉は、博愛主義だの、貧困者援助だの、キリスト教慈善活動などの言葉ではなかった。多忙でほとんど時間のない代表の興味を引いて、立ち止まらせ態度を変えさせたのは、「か弱い乙女による貧しい人々への援助を実現させるために」という逆説めいたアダムスの謙虚な言葉だった。「なぜ、か弱い乙女が社会改革者になれるのですか？」代表はアダムスをまじまじと見つめて尋ねた。

「か弱い上流の子女も援助者としての生きがいを経験すれば元気になり、社会改良にも役立つでしょう」[17] 暇を持て余す上流マダムに虚栄心を満足させる気まぐれの慈善事業は存在しても、アダムスのようにうら若き上流婦人の能力を発揮させ、生き甲斐を与えるという発想は誰も考えてはいなかった。

実際イギリス上流社会同様、アメリカでも教養と知性がありながら女性の社会進出は一般的ではなく、才能を生かせずうつうつとした日々を送る若き女性が多かったのだ。事実アダムス自身も自己の存在をかけた仕事に高揚し、やるべきことに追われて持病も消えたように健康になっていた。まさに援助は一方的なものでなく、相互作用、与えるから受けるという互恵性の具現化だということを、身をもって体験したアダムスの説得は何物に増して効果があった。

3　海図のない航海への船出
―ロマン主義と社会派の時代へ―

ナイチンゲールが看護の仕事を目指して努力を重ね

ている時期、1840年—60年代のヨーロッパ近代の風俗、市井の人々の営み、価値観は、小説など文学の中にもよく反映、表現されている。フランスでは「レ・ミゼラブル」のビクトル・ユーゴー、[18]「パルムの僧」「赤と黒」のスタンダール[18]、「谷間のゆり」バルザック[19]、「ボバリー夫人」のフローベル[20]などが、自然主義からロマン派に移行する過程で社会と個人、家族、男女の人間模様をまさに人間的ロマンとして描いていた。特に女性をヒロインとした作品も多く、未婚女性より円熟味の増した既婚の女性を、一個の個人としてその財力や才能を生かしてに活躍する様、また恋愛など葛藤に苦悩する様を写実的手法で描いている。それまでのフランス上流階級のサロンの文化的蓄積によって花開いた近代文化は、女性の精神性、知性を男性同様、いやそれ以上に深め高く引き上げていた。イギリスにおいてはデッケンズが「オリバー・ツイスト」「クリスマスキャロル」などで主に社会派として階級性の矛盾と貧困社会の問題点を、テニソン[21]、エリオット[22]などが社会派とロマン派を織り交ぜて階級制度の中で苦悩する個人を描いている。一方ロシアでは急速な近代化によって、人間社会の矛盾や宗教性と個人の魂の救済などをテーマに、この時代から多くの偉大な文学が堰を切ったように書かれた。ツルゲーネフ[23]による「猟人日記」以後、「父と子」からドフトエフスキー[24]の「罪と罰」「白痴」「悪霊」、トルストイの[25]「戦争と平和」「アンナ・カレーニナ」とロシア文学の豊饒な時代が続く。またアメリカでは新しい価値観と人道主義を訴えるストウ夫人の「アンクルトムの小屋」、メルビルの「白鯨」[26]、ソローの「森の生活」[27]などヨーロッパとは一味違う新鮮な文学が生まれた。

これらの文学とナイチンゲールの関係を考えると、2度も長期ヨーロッパ滞在をし、語学も達者であったナイチンゲールであるから影響を受けていないはずはない。フランス文学，アメリカ文学は上流階級の社交界サロンを通じて非常に影響力があった。実際彼女はロンドン社交界で、幾人かの英国作家とも親交を結んでいる。家族からの自由はなかなか獲得できなかったが、看護婦の世界に多少近付いたナイチンゲールは、社交界において自分の未来の活動に役立つその時代の独創的人々、前述した女流作家のジョージ・エリオット、政治家で社会事業専門のシャフツベリー卿、聖職者、スタンレイ卿等などと親交を結んだ。

—看護活動の手初め—

それらのつてを利用して、かねてから見学を希望していたダブリンのいくつかのカソリック修道会病院を巡り歩いて実習を試みることに成功した。というのは当時専門的看護がなされていたのは唯一カソリック修道会の経営する病院だけであったので、その看護内容、管理方式などすべて他では見られないもので、例によってナイチンゲールは克明な見学記録を付けた。

反対する家族の説得には、幼い頃から親交のあついメイ叔母（父の妹）とブレースブリッジ夫人が当たってくれた。またその前後では父親の目の治療のための看護、95歳の祖母の最後の看病など、家族のためにも自分の看護学の成果を生かし、家族を徐々に諦めと承諾に導いていった。

そして1853年、もはや結婚を両親から期待されず、幾分気楽になった32歳のナイチンゲールに最初のチャンスが訪れる。それは慈善団体の運営である『Ladies' Hospital（淑女病院）』[28]が組織変えの必要に迫られていた。そこの看護長兼施設長をナイチンゲールにと、シドニー・ハバード夫人が推薦してくれたのだ。

過去積み重ねた病院研究と実習の活かせる社会的な仕事として、ナイチンゲールは是非にでも引き受けたかったが、そのためにはロンドンに移りエンブリーの家から独立することを必要とした。またしても上流階級の慈善活動としてなら許容できるが、家を出て病院の看護婦になるなど、家の恥だから認められないと母親と姉は主張した。それに対してただ一人父親は、娘の長年の熱意と志しを、半ば諦めをもって支持したのだった。父親は、32歳にして結婚を期待できそうもない娘に、家政婦を雇って独立して暮らすに十分な年金をつけてロンドン居住を許した。ナイチンゲールはここで初めて自分の実力と蓄積を試すチャンスに恵まれ、それまで頭の中で描いていた看護のノウハウ、病院の機能と設備改善を次々に実施する。

食糧の購入の合理化、調理人の教育による食事のレベルアップ、洗濯の効率化によるリネン類の衛生管理など、いずれも上流家庭で行われる家政の多少の拡大で、家事と根本的に変わらない。その他、病院の運営決定権のある理事会との折衝、医者との関係調整、多くの使用人の人事管理など新しく経験することも多少あった。しかしここでの一年は、独立して自分のやり

たかったことを次々実現し、思うように采配を振い、ナイチンゲールにとっては充実した時期であった。

「わたしは幸せな気持ちで、今年の新年を迎えました。この新年こそ生まれて始めての本当のハッピーニューイヤーです」1854年の新年にメイ叔母に書き送っている。その手紙は看護婦の一人として、自らきりきり舞して施設内を駆け巡っている多忙なナイチンゲールが、その年書いた数すくない手紙の一つである。なぜナイチンゲールがさほどに多忙だったというと、看護婦がすくない上、彼女らは最低限必要な訓練さえなされていなかったからである。管理や日常業務に走り回っているナイチンゲールには、看護婦訓練の時間的余裕もなかった。この看護婦訓練こそ、それ以前からナイチンゲールが自分のライフワークとして心に決めたことであるが、まだそこに着手するには時期尚早であった。当面病院全体の機能改善が先決であった。

そのころの病院は、大病院でも街の下町に建てられており、環境的問題や設計上の欠陥、不完全な換気と過密により、良い治療環境とは言いがたかった。ナイチンゲールはそれまで多くの病院を見学調査しており、淑女病院での体験を照らし合わせて改善点などを細かくノートしていたが、その内容は後1859年に「病院覚書」として出版され、多くの看護や病院施設改善に役立った。

この中でナイチンゲールは、病人の暮らしの場である病棟の在り方を研究改革し、部屋の広さ、窓の広さの設計、位置、床の構造、材質、ベッドなど家具の種類、またプライバシーの保護のためのカーテン、仕切りなどへの配慮、食事のため配膳台、調理場まで細かい指摘をしている。看護が合理的にできるよう、ナースステーションの位置から婦長が看護婦の働きを一目で見てとれたり、それまで看護婦の仕事であった調理場からの食事の運搬にリフトを利用したことなど、父親の理数的、建築家的センスが随所に現れている。

また「患者たちの呼び鈴はすべてその階の看護婦室のドアのすく外の廊下で鳴り、かつまた同時に呼び鈴がなると弁が開いて誰のベルが鳴っているか即座に看護婦に分かるように、しばらく弁が開きっぱなしになっているようにすべきです」[29] など、極めて合理的センスが伺える。ここでの病院管理の経験、そしてその後ロンドスラム街で発生したコレラの患者の入院で騒然とした大病院への看護応援の経験など、すべて後のクリミア戦争スクタリ陸軍病院での活躍と改革に生かされる準備をしていたことになる。

注

1) リバプール船舶会社の社長、社会改良家、統計家でもあるチャールス・ブースによって行われたイギリス社会保障制度創設のきっかけともなる調査。ロンドン調査とも呼ばれ、1889年から4回、ロンドンの都市生活者の貧困の実態を浮き彫りにした。これは社会福祉の援助技術のひとつである社会調査の草分けとして意義あり、1908年の無拠出老齢年金の成立につながった。
2) ジェーン・アダムス著　柴田善守訳「ハルハウスの20年」岩崎学術出版社 1978　50頁
3) 同上57頁
4) 53頁
5) 56頁
6) アルベルト・デューラー（1471—1528）　ドイツの画家でルネッサンスの新風にふれ聖書に題材を取り、荘厳で重厚な作風の絵画や壁画を残している。絵画70点，銅版画約百点、木版画約二百点、デッサン千点以上の作品の他、覚書、書簡、日記など美術文献としての域を越え、文学的価値も有する。代表作に1548年の「ヨハネ黙示録」やムーラン大聖堂の栄光の聖母像などが有名。
7)「ハルハウスの20年」58頁
8) アメリカプロテスタント宗派でユニテリアンなどと共に、大きな宗派で特に中産階級以上に信者が多い。
9) デアコニッセとはプロテスタントの女性伝道師であり、独身で共同生活をしながら、看護婦や教師など社会奉仕活動をする。カトリックでのシスターのような聖職者である。
10) カタコーム原始キリスト教の信者がローマの役人の弾圧を逃れて、集会に利用したローマ人の葬られた集団墓地。
11)「ハルハウス20年」65頁
12) セツルメントとは1870年代、イギリス都市のスラム問題の解決のため貧困者との生活接触により意識啓蒙を目指し、教養ある人々がスラムに定住した運動。1884年のバーネットによるトインビー・ホールが有名。大学人によって始められたので「大学殖民事業」とも呼ばれ、アメリカ、オランダ、フランス、ドイツでも発展した。我国では1891年A.アダムスによる岡山博愛会、片山潜によるキングスレー・ホールがある。
13) トインビー（1852—1883）はイギリスの社会経済学者でオックスファード大学で学んだ後、労働階級に関心を持ち、その生活向上のため共同組合、労働組合、政府の援助の必要性を説いた。学生時代からセツルメント活動に参加していた。著書に「産業革命史」などがあり、まさにアダムスが手本とできる人物であった。
14)「ハルハウス20年」65頁
15) 修道院中世、あまりに世俗の権力と結び付き腐敗した教会と別れて、辺鄙な山奥や荒野に修道僧がこもり、祈りと瞑想の宗教的生活を始めた。これらの修道僧は薬草を育て病気を治し、自然科学からあらゆる学問の専門家がいて、医

学、学問の中心となり病院、大学となった。修道院活動で歴史に残るのは、ローマの遊学時代に世の道徳的腐敗を嘆いて森の隠遁生活に入ったベネデイクトである。後の修道院のモデルとなった『ベネデイクト戒律』には病んでいる人への心掛け、ホスピタリテイの源である来客に愛をもって尽くす、もてなしの心得などが書かれている。

16)『世界の伝記ナイチンゲール』 足沢良子　1986 ぎょうせい　99頁

17) ビクトル・ユーゴー（1802—1885）フランス、ロマン派の代表的作家、社会の不当さに苦しむ民衆への同情を不幸な人々へのキリスト教的人類愛、社会改革を意図した作品に託している。

18) スタンダール（1783—1842）本名はアンリ・ベイルでフランスロマン派の代表的小説家。グルノーブル生まれで青年時代ナポレオン軍退役し、ミラノで作家となり、恋愛事件でパリに戻る。フランス王制末期の混乱した階級社会を風刺的に描いた作品が多い。『恋愛論』『パルムの僧院』「ミラノ人、アンリ・ベール、生きた、書いた、愛した」という墓碑銘が有名。

19) オノーレ・デ・バルザック（1799—1850）パリ大学法学部学生として法律事務書で働く一方、文学への夢立ちがたく、屋根裏部屋で小説創作に専念し始める。40代で「谷間のゆり」「従妹ベット」「ゴリオ爺さん」「人間喜劇　16巻」など身分的秩序の崩壊と、市民社会の台頭の近代化の時代背景を描いて成功を修める。いずれも近代個人の悩める心情をリアリステイックな筆で描写し分析している。

20) ギュスターブ・フローベル（1821—1880）フランスの病院長である外科医を父として、死者や病人を見て成長し、10歳から小説を書き始める。パリ大学法学部に進むが終生の持病である神経発作に倒れ、ルーアンに引きこもり創作に没頭する。本人は否定するものの、作風は写実主義と自然主義を代表しており、退屈な田舎医師と結婚したロマンを求める女性、ボバリー夫人とそれをめぐる男たちを特徴的に描いた「ボバリー夫人」は、フローベルをして「ボバリー夫人は私だ」と言わせた。

21) アルフレッド・テニソン（1809—1892）ビクトリア朝のバイロンに次ぐ英国国民的詩人。既成宗教のモラルとの相克から生まれる不安と懐疑の時代精神を、感傷的美しい詩にして民衆の人気を博した。ギリシャ神話、アーサー王伝説、イギリスの田園生活を素材にした「ユリシーズ」「アーサー王伝説」「くだけ波よ」で名声を確立した。日本でも土井晩翠、岩野泡鳴らが思想的影響を受け、夏目漱石も「文学論」で「イノック・アーデン」の感化を自ら認めている。

22) ジョージ・エリオット（1819—1880）　英国家庭小説の流れを組み、ビクトリア朝の文化的思想的変化を吸収して、多くの作品を残した女流作家。田園ものから歴史小説まで様々に作風は変化しながらも、テーマは広い人間愛と人間に内在化する自己中心性の葛藤と一貫している。代表作として『サイラス・マーナー』1861『ロモラ』が有名

23) イワン・セルゲヴィッチ・ツルゲーネフ（1818—1883）ロシア中部の地主貴族出身。暴君的地主であった母の領地で農奴たちの悲惨な生活に同情して、農奴解放を若くして誓う。15歳でモスクワ大学に入学し、観念哲学古典文学などを学び、物語詩「パラーシャ」で文壇デビューする。後パリに移り世界的名声を得た最初のロシア作家となる。詩から戯曲、そして農奴解放に大きな影響力を与えた「猟人日記」の散文詩で確固たる地位を確立した。作品のテーマは社会的であるが、文体は優雅で洗練された調和をもつ。日本では明治中期、二葉亭四迷によって「浮き草」が紹介され、島崎藤村など自然主義文学に影響を与えた。

24) ドフトエフスキー（1821—1881）モスクワの貧民病院医師の2男で陸軍中尉を退役後、「貧しき人々」でデビューした。写実主義的、ヒューマニズムの人気作家となるが、革命思想家との連座事件でシベリア囚人生活を10年経験する。後出版業に失敗莫大な負債を抱えながら、歴史に残る3大傑作「罪と罰」「悪霊」「白痴」などで、ロシア革命前の知識人の精神的苦悩を描いている。

25) トルストイ（1828—1910）伯爵の家に生まれ、大学を中退し農業改革に失敗、放蕩生活の後、クリミア戦争に従軍し栄誉を得る。この経験は後の「戦争と平和」のモチーフに活かされる。西ヨーロッパ旅行の経験により、文明の悪を実感しルソーの自然主義に回心して、後小説をかき始める。「アンナ・カレーニナ」「戦争と平和」はロシア貴族の精神的苦悩を表し、これは彼自身の分身でもある。日本では武者小路実篤が単なる作家ではなく、思想家でヒューマニストとして信奉している。作家として確固たる地位を保ちながら、家庭生活、宗教的葛藤などに苦しみ、82歳で家出し、旅先で亡くなる。

26) ハーマン・メルヴィル（1819—1891）ニューヨーク名門の生まれだが、12歳で父と死別し、これが宇宙での孤児体験として放浪癖となる。19歳で水夫となり捕鯨船にも乗りこむが、マルキーズ諸島で脱走、ハワイや南太平洋を放浪する。この経験がキリスト教社会の文明や道徳への相対性を開眼させる。1851年の代表作「白鯨」は、リアリズム描写と象徴的手法を駆使している。

27) ヘンリー・デイビッド・ソーロー（1817—1862）マサチュセッツ州コンコード生まれ。ハバード大学卒業後、故郷で教職に就くが、当時習慣であった鞭の刑罰に反対して辞職。世俗的生活は精神性を汚すとして、ウオールデン池のほとりの小屋で2年2ヶ月隠遁生活を送る。これが主著である「ウオールデン」1854（日本語訳　森の生活）で、散歩者の精神から「メーンの森」「ケープコッド」などを発表し、奴隷解放など政治関心も強かった。

28) Ladies' Hospital その時代の中産・下流階級の身寄りのない独身女性が老齢となり、下宿や一人暮らしができなくなると入る現代のケアハウス、特別養護老人ホーム、ホスピスにあたる。上流階級の寄付と入所者の預託金で運営され、救貧院などよりはるかに環境と待遇は良い。

29) セシル・ウーダム・スミス著武山満智子・小南吉彦訳『フローレンス・ナイチンゲールの生涯』上巻165頁現代社1981年